観音

平成２年１月

第 12 号

年２回発行

発集発行

小出真行

うかうかと時を過すのも
一路向上するのも
皆心のあり方に依る

五部陀羅尼問答偈讃宗秘論

としとれば（五）

くどくなる
気短かになる
グチになる
でしゃばりたがる
世話やきたがる

仙崖・老人六歌仙

そうですね。人というものは年をとるにつれて一つものを言うのも少しづつくどくなりがちになってきますが、そんな時は周りの人に嫌がられないようになるべくサラリと語りましょう。短気が出そうになったらもう一度ゆっくり考えてみましょう。

お釈迦さまも

「グチが出たら殺せ、グチを殺せば安楽になるぞ」

と教えています。

そして、人の世話をやくのもほどほどにして、家の中のお内佛（佛壇）の前に出て、お内佛のお世話をしましょう。そうすれば、佛さまもきっと「ようこそ、ようこそ」と喜こんで慈悲の眼を向けられるに違いありません。そうすれば心も落ちついて気持も豊かになるでしょうね。

戒名とは

この世からあの世へ行く時に戒名というものをつけてもらえると一般に考えられていますが、この戒名とは、戒を受けて佛教者になった者、つまり得度して佛門に入った者に与えられるもので、宗派によって呼び名も異なります。本来ならば、生前に授けられるのが本当ですが、最近では亡くなってから菩提寺の僧侶が葬儀のときに授けられる場合が多いようです。

戒とはもともとサンスクリット語で「シーラ」といい、自発的に悪を拝し、善をすすめるおきて、という意味で

インドの佛教学者である龍樹も（真言宗では付法の八祖の一人です）

（大智度論）で

「好んで善道を行い、自ら放逸ならざるこれをシーラと名づく」

と述べておられます。

インドでは僧侶になるために出家すると、すべて釈氏とか沙門と呼ばれていますのに対して中国では戒を受けると俗名を捨て、改めて戒名が授けられますが、この戒名は普通二文字で、中国では梁の明帝が等観、わが国では鑑真和尚によって聖武天皇が勝満の戒名を授けられたのが最初だとのことです。皆様が御存知のあの鎌倉時代の武将である上杉謙信や武田信玄の名前も戒名でして、俗名は輝虎や晴信といいます。ところが佛教による葬式、法事が盛んになり、僧侶が葬式をつかさどるようになった室町時代あたりから、亡くなった人を成佛させる追福の慈悲心から「没後作僧（もつごさそう）」といって葬儀のとき、亡くなった人に佛弟子となった意味の受戒をし、戒名を追贈するようになりました。そして、人が亡くなっても受戒しない者は成佛せず、その霊は亡霊として宙に迷うと考えたのです。

元来、二字でありました戒名も後になると各宗独自の道号をつけ加えたものや、遺族にあやかって院号をつけたものが喜ばれるようになり、今日見られますような多文字の戒名に広がっていったのです。

この戒名のつけ方ですが、亡くなった人の生前中における菩提寺や社会への貢献度、信仰心、地位、家柄、人柄、経済力など全てのものを考慮してつけられまして、宗派によって多少の違いはありますが、菩提寺や本山から授けられまして、その返礼として一定額の戒名料を寄進するようになりました。

さて院号ですが、院号とは聖武天皇が奈良に施薬院や悲田院を建立したことでわかりますように官庁名で，その後淳和天皇のときに天皇が譲位されてから御所を院と称し、冷泉天皇以後に院名が戒名にとり入れられたのです。遺族からは関白藤原兼家が亡くなって法興院如実と称したのが初めで、お金や土地を寄進して一寺院を菩提寺として建立し、その寺院名を亡くなった後、名のったわけです。武士の間では、これら皇室や遺族と区別するために足利尊氏が亡くなったとき、等持院殿という「院殿号」をつけられ、江戸時代以後に院号より院殿号を上位と考えるようになりました。そして現在においても「院殿号」が最局位の戒名だといわれています。

居士とは、中国では官界に入らず、家にいて御行する人を指していましたが、次第に出家しない佛教の篤信者を称するようになり、大姉とはもともと尼僧を指していましたが、女性の尊称として居士と同様に用いられるようになりました。

信士、信女とは、優婆塞、優婆夷（い）という佛教信者として、五戒や十善戒を保つ成年男女を称し、童女、童女は未成年男女を指

し、孩児、孩女は幼児、幼女を指し、嬰子、嬰女は出産直後の乳幼児を指し、水子は死産、流産児に用いられています。

最近、こうした戒名はお金で買うものと誤解されるむきもありますが、あくまでも本来の意味を充分にお知りおき下さい。

手

両手の手の平のシワとシワを、顔の前で合わせてみて下さい。不思議なことに何となく落ちついた気分になってきませんか。だから〝シアワセ〟というのです。では今度は反対に、手の甲と甲、つまり背中合わせに合わせてみて下さい。きっと、指のフシとフシがゴッゴッて、ぴたりと合わないでしょう。だからそれを〝フシアワセ〟というのです。

シワとシワを合わせるから幸せと言いましたが、それは冗談でも何でもありません。人間誰しも、仲の良い時はお互いに正面から向かい合って話に大いに花を咲かせますから幸せですが、逆に仲の悪い時は背中を向けあって顔を見るのも嫌になりろくに話をしませんから、これではやはり不幸せでしょう。

従って手と手を合わせる。つまり合掌することは、こうした心の状態でありたい。このような幸せな家庭、社会でありたいという願いと祈りがあるはずです。ですから合掌は、単なる形式だけのものではありませんし、神佛を拝む時だけのものであってはならないのです。大事なことは、その合掌の心を普段の生活の中に生かす努力をすることだと思います。

さて、この両手ですが、右手と左手がありまして、それぞれ役目が違っていることにお気付きでしょう。例えば、食事の時は右手で箸を持てば、左手で食器を持ちますし、写を書く場合、右手で筆やペンを持てば、左手は紙を押える役目を担当します

この異った同士がピタリと一つになった時こそ、初めて〝和〟が生まれてくるのです。だから合掌のままですと喧嘩もできません。合掌することによって落ち着きを取り戻すこともできますし、息を整えることもできます。ということは、合掌は〝平和のシンボル〟だといっても決して過言ではないでしょう。

更に、この手はいろいろな役目をいたします。例えば、子供を誉めたりする時は、やさしい笑顔で「よくやった。」と手で頭をなでたりしますし、逆に叱る時は手で愛のムチを使ったりするでしょう。痛いところは手でさすり、かゆいところは手でかいたりします。さらに、挨拶がわりに握手もしますし、ハンコがない時は、拇印といって親指がハンコの代わりをしますが、もっとも足の拇印は受けつけてくれません。物を作り出すのも仕事をするのも、ほとんど手が中心となりますので、私たちが生活を営む手段は何といっても手が主役でしょう。ですからこの手は「自分の代表」でもあり「身代り」なのです。

その証拠に「手」のつく言葉は多いですね。思いつくままにあげてみますと、踊り手、歌い手、話し手、聞き手、相手、働き手、追っ手、やり手、もらい手、決まり手、決め手、攻め手、取っ手、切手、……。こんなに沢山あるのです。でも、ロッテ、アサッテ、シアサッテなどは違います。これだけ並べてみただけでも、いかに手は自分の主役であり、代表であるかわかると思います。

けれどもどうも私たちは、人前で合掌をするには気がね、てらい、ためらいが邪魔しますし、他人の批評に神経質になりがち

になります。でも勇気をもって生活の一部として合掌を取り入れたいものですが、えてして千差万別「必要性がない」とか「宗教教育だ」とかいって、すぐ物ごとをねじ曲げて考えたがる片寄った考えの人がどこの世界にもいるもので、そんな人は心も視野も狭く、天邪鬼みたいな哀れな人だと無視すればいいのです。ですがそんな人でさえも試験の時とか、病気で困った時、あるいは試合がエキサイトした時など自然に合掌しているからおもしろいですね。

要するに合掌は理屈や理論ではありません。人間が一番人間らしい自然の姿なのではないでしょうか。

まあとにかく、皆様も理屈抜きにして食事の前後の合掌から始めてみてはいかがですか。

さて、この「手」について、佛教詩人の坂村真民先生の味わい深い詩がありますので紹介します。

両手の世界

両手を合わせる　両手でにぎる
両手で支える　両手で受ける
両手の愛　両手の情
両手合わしたら　喧嘩もできまい
両手で持ったら　こわれもしまい
一切衆生を　両手に　抱け

どうですか、何となく手のありがたさが少しおわかりになりましたか。どうぞ心をこめて大切に動かしてみて下さい。

よいことを

この世の中はおかしいもので、社会でいくら新聞紙上を賑やかすような悪い行動をしても立派な地位につき裕福な生活をしている人もあれば、地道にこつこつと努力しても報われず不運な生活を続けている人もいます。

しかし、それは一時的な姿であって継続的に続くものではありません。佛教では因果応報を説き、必ず原因があってこそ結果が現われてくるものと説いているのです。

むかしの諺に

「桃栗三年、柿八年、梨子の馬鹿めは十八年」

といわれていますように、人間の社会でも、今月、善いことをしたから直ちに、明日良い結果があらわれ、又、逆に悪いことをしても直ちにあらわれるものではありません。このことを伝教大師が発願文に

「因なくして果を得る。このことわりあることなし、善なくして苦を免れる。このことわりなし」といっておられます。

佛教は過去、現在、未来を通じて因果の理を説いているのです。人間、誰しもが今晩死ぬと思っている者はいませんが、しかし、死ぬかもわかりません。ただ死なないものと思って明日という未来を夢みて生活しているのです。

この世の社会で悪いことをして、現在は立派な生活をしていても、やがて未来では悪い結果となって報いが生じるのが当然でありましょう。未来とは、明日か、一年、十年先か、又死後の世界かわかりませんが、ただ言えるのは、未来とはやがてくる自分の将来という意味でもあるのです。それは、自分の代か、子の代か、又は、孫の代かさてさて……。

と考えますと、やはり悪いことは出来ないものですね。